

## 論文

### ラスキンとヒル ——ラスキンの親方—徒弟関係とモラル教育の一例

津村 真衣

#### はじめに

1854年9月24日、ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) はトレヴェリアン卿夫人 (Pauline Trevelyan) 宛の手紙で、「彩飾 (Illumination) を看板画家や若い婦人たちに教授したい」(36: 175) と自身の将来の計画を綴っている。<sup>1</sup> 中世の彩飾復興をはじめ、芸術活動によるモラル回復を目指してラスキンが雇い始めた徒弟たちの中には、後に住宅改革で名を馳せるオクタヴィア・ヒル (Octavia Hill, 1838-1912) の姿もあった。ラスキンのラファエル前派擁護の手紙に共感を示していたこの *Modern Painters* の読者は (LOH 29-30)、1853年、母キャロラインの助手として働いていた the Ladies' Guild という女性のための共同ギルドでラスキンと出会う (W. Hill 29)。それ以降、ラスキンの支援を受け彼女が住宅改革に本格的に着手する1864年まで、約10年にわたり二人の親交は続き、それはラスキンにとって親方と徒弟とのあるべき関係性を自ら実践する機会となった。

Robert Hewison や William Whyte による近年の研究において、住宅改革やナショナル・トラスト運動といったヒルの後の社会活動にみられるラスキンの芸術やモラルの考えの影響が指摘されたことから、1853年の出会い後の約10年間における両者の関係性の重要さが再認識されてきている。これまでラスキンのヒルへの肯定的な影響としては、1860年代の住宅改革における投資、すなわちパトロン的役割の側面から考察されていた (Anderson and Darling 40; Darley 91-99; Prochaska 130; W. Hill 56-67)。一方、本稿で扱うそれ以前の親方と徒弟としての関係性は、ヒルの芸術的才能を伸ばすことなしに模写のみをさせるに至っているというジェンダー

的観点からの否定的な見方 (Nunn 10)、彼女の後の社会活動にはなんら寄与していないとする見方がなされていた (Darley 71; Eagles 118)。しかし、これらの主張は詳細な分析に基づいているとは言い難い。Whyteが主張するように、「徒弟の彩飾師から精力的な社会改革者へのヒルの移行が、自身の芸術教育の放棄というより達成を表している」(56) とするならば、ラスキンが試みた教育面での親方―徒弟関係の実践は、後の社会活動において花開いたヒルのモラル的・芸術的感覚をどのように養っていくことになったのだろうか。

本稿では、モラル教育の実践という観点から、ラスキンとヒルの1850年代～1860年代前半の関係性をラスキンの親方―徒弟関係の一事例として考察する。まず、1850年代にラスキンが徒弟たちを雇用するに至った背景を概観し、次に、ラスキンが自身の論稿において主張している親方―徒弟観に基づき、ラスキンとヒルの書簡を読み解きながら、親方―徒弟としての二人の関係性を描き出す。<sup>2</sup> 後半では、徒弟ヒルへのラスキンの関わり方が含む理想と現実の狭間での矛盾に着目しながら、ラスキンの宗教的背景とジェンダー観がどのようにヒルとの親方―徒弟関係を特徴づけたのかについて分析を試みる。ラスキンとヒルの初期の関係性に光を当てることで、親方と徒弟との精神的繋がり の回復を通して芸術・社会のあり方を問い直すというラスキンの教育的実践を考察する糸口を提示したい。

## I. 1850年代：彩飾復興の試み

ラスキンの彩飾復興への道のりは、1850年代初めに始まった。彼は、自叙伝的作品とされる *Praeterita* (1885-89) において、1850年もしくは翌年に「洗練されてはいないものの、たいそう立派でグロテスクで純粋な色彩に富んだ、14世紀の聖母マリアの小聖務日課書」(35: 490) に出会ったことを回顧している。1851年から1852年にかけて、ヴェネツィア建築についての執筆により一時中断されたものの、続く2年の間に大英博物館に頻繁に通い写本を研究していたことから (Cook, Introduction lxvii-lxviii)、彼の彩飾への興味が並々ならぬものであったことは明らかである。

すでに芸術が持つモラル的側面に強い関心を示していたラスキンは、この期間、彩飾の工程が持つモラル教育的要素に惹かれていたようだ。ラス

キンと出会った当時、ヒルは「絵を描いたガラスを固い材料で裏打ちして強度を増し荷重に耐えるようにした」強化ガラス制作に携わっており（ベル 18）、下絵の彩飾を行っていた。1855年ラスキンは強化ガラスのテーブルをヒルに依頼するが、そのヒルの下絵に対するラスキンの批評からは、彩飾の工程において彼が重要と考える技術、またそれに付随するモラルの特質を解き明かすことができる。ヒルはその内容を、以下の妹エミリーへの手紙に記している。

彼ははっきりと、私のデザインはよくできていると思っていました。モミとキイチゴをほめてくれて、私がどの色をどこに配置すべきか正確にはわかっていないのをとがめて、それからこんなことを説明してくれました。…形の単純さは色を見せるために必要であること。どんな色も、少しずつ変化させない限りは価値があるとはいえないこと。草は私たちが思っているより黄色であること。…14~15世紀には、13世紀に比べ、出来栄えが粗野になって、より花模様が増え、グロテスクさが減少したこと。（LOH 37）

ここでは、ラスキンが、単純な線描の重要性、観察力、色彩の変化について示唆していることに注目したい。ラスキンによれば、彩飾において「対象は徐々に変化を加えられた純粋な色彩と正確な輪郭によって常に表象されなければならない」（12: 482）のであり、これら二つの彩飾に不可欠な要素を極めていくことが彩飾師のモラル向上に役立つとラスキンは考えていた。

まず、ヒルに対し、「形の単純さは色を見せるために必要であること」を教授している。この「形の単純さ」に関わる「輪郭」にラスキンはどのようなモラルの特質を見出していたのだろうか。イタリア・パドヴァにあるアレナ礼拝堂のフレスコ画の説明書ともなっている *Giotto and His Works in Padua*（1853-60）の中で、「境界線によって厳格に囲まれた装飾」は自己抑制の表象として機能すると述べている（24: 32）。つまり、輪郭を描く過程は彩飾師に自己抑制というモラル概念を付与する。さらに、彩飾のための線描は「正確さ」を要するため、彩飾師の観察力を高めるとする（20: 134）。

この観察力は、彼が生涯にわたって説いた透察的想像力(“imagination penetrative”)<sup>3</sup>、すなわち真実を見る力を指す。ヒルへの批評でラスキンが「草は私たちが思っているより黄色である」と述べていることから、線描の過程と同様に、正確な観察力によって真実の色彩を捉えることをラスキンはヒルに促している。ラスキンによれば、「モラル感情と想像力の間には互惠的な作用が存在」(4: 257、内藤訳 231)し、ここでラスキンが述べるモラル感情とは共感である。つまり、この鋭敏な観察力ともいえる想像力を高めることは他者への共感を可能にするのだ。彩飾の工程は対象を注視し、真実を捉える力を養い、それゆえ芸術の領域をこえて社会においても他者との結びつきを支える共感というモラル感情を育ていけるとラスキンは信じていた。

また、ラスキンはヒルの下絵に対し、「どんな色も、少しずつ変化させない限りは価値があるとはいえないこと」を挙げ、ヒルに彩飾における色彩の重要性にも目を向けさせる。彼は、*Modern Painters* 第一巻(1843)において、ターナー(J. M. W. Turner)の色遣いにみられる純粋性(purity)と節度(moderation)を、色彩によって表現されるモラルの特質として取り上げている。美を中心に論じた*Modern Painters* 第二巻(1846)の「純粋性(Of Purity)」という章において述べているように、純粋性とは神性を確信させる「エネルギーの型(the type of Energy)」(4: 129、内藤訳 160)であり、George Landowの言葉を借用するならば、そのような「純粋性の美しさは明るく、明瞭で、力強い色彩のうちに体现されている」(144)。このような色彩の純粋性を掲げながらも、ラスキンは極端な色遣いに走らぬよう警告している。「繊細で抑制された色彩の…原則」(3: 293、内藤訳 178)に沿うように、純粋な色は「ターナーだけによって、自然がそれらを用いる場合に自然より控えめな程度に用いられた」(3: 291、内藤訳 176)のである。ラスキンによれば、このような色の用い方は「自制ないしは節度(restraint or moderation)」(4: 138、内藤訳 166)というモラルの特質を表している。このような色彩の原理こそ、ラスキンが中世の彩飾に認めたものであった。

つまり、ラスキンにとって、対象を正確に捉えて輪郭を描き純粋かつ和らげられた色を生み出すという彩飾の工程は、その工程に関わる彩飾師にモラル概念を教え、モラル感情を養成するという点で非常に教育的であっ

たのだ。このように、彩飾がもつモラルの特質を確信していたラスキンは、彩飾の復興に向けて動き出し、1855年4月、「今私が着手している様々な仕事のうちのひとつとして、彩飾技術の復興へ尽力しています」(36: 197)とエリザベス・ブラウニング(Elizabeth Barrett Browning)宛てに書き送った。そして、この彩飾復興の試みの一端としてヒルとの関係性が始まることになった。

## II. 親方—徒弟としてのラスキンとヒル

前述の通り、1855年にはヒルへ仕事を依頼していたラスキンだが、親方としてヒルに接近することになったのには、ヒル一家が直面した経済的危機—母キャロラインの失職とギルドの失敗—(LOH 20-21; W. Hill 37-38)があった。ヒル一家がこのような危機に直面したのは初めてのことでなく、父ジェイムズの倒産をはじめ家族の借金によって(W. Hill 25-26)、金銭的問題はヒルの幼少期より一家を取り囲んでいた。しかし、そのような状況下でも、公衆衛生改革に従事したトマス・サウスウッド・スミス(Thomas Southwood Smith)を母方の祖父にもつ彼女を育んだ家庭環境は(W. Hill 27-28)、ヒルを「自身から他者のために尽力するという力を奪うであろう」(LOH 74) 仕事から遠ざけ、ラスキンのもとで「絵筆」をもって社会に貢献することを決意させた(OH 128)。

依頼したテーブルの仕上がりに満足したラスキンは、1856年、彩飾のためにヒルを雇用することになる(LOH 75)。新たに始まったラスキンとヒルとの関係性は、ラスキンが思い描いた親方—徒弟観を多面的に映し出すものであった。まず、彼の労働観やチャリティ観を反映する形での雇用主と被雇用者との関係が見受けられる。ラスキンは、貧困という問題に対し表面的にしか取り組まない社会への憤りを露わにし(17: 60)、「思慮に欠けた金銭的な施し」である非選別的チャリティに対しては「有害である」として批判的であった(17: 540)。彼は、労働者自身が働くことによって喜びを享受し社会に貢献できるようになってほしいと考えていた(17: 545)。その道筋として示したのは、労働可能な労働者には仕事によって生計を立てることを奨励し、「思いやりと思慮という施し」(17: 540)を行うことだった。ここで指す「仕事」とは、近代的な大量生産とは本質的に

異なる、後に聖ジョージ組合 (St. George's Guild) で彼が推奨した手工業や芸術ということになる。生活に困窮していたクルックシャンク (George Cruikshank) に対し妖精物語の挿絵を依頼することで支援しようとしたように (36: 502n3, 503)、一家の財政難に際しヒルを雇うという方針は、雇用主、より正確に言えば親方としてのラスキンの理想的な労働の姿を映し出しているともいえよう。彼女が入用になればいつでも仕事を依頼する準備ができていたように (OH 133-34)、あくまで自身の手で生計を立て喜びを得ることを彼は望み、その手助けが親方―徒弟という関係において可能であると信じていたのである。

また、ラスキンは、親方のあるべき姿として「子」のために犠牲を厭わない「父」のイメージを思い描いている。 *Unto This Last* (1862) で述べているが、親方は雇用している徒弟たちに対して、「際立って父親らしい権威と責任」(17: 41) を持つべきだと考えていた。ヒルも気づいていたように、彼は自身の仕事に全精神を注ぐ傾向にあり (OH 125-26)、自身の限界を超えて尽力しがちであった。1860年1月29日のラスキンの訪問を回顧したヒルの言葉は、そんな彼の様子を鋭敏な観察力をもって書き留めている。「彼の体調が悪いと思って、それから歯痛に悩まされて一晩中寝付けずにいたとわかったの。だから、私の仕事のお世話をしないようにって頼んだわ。でも彼はそうするでしょうね」(OH 175)。これはラスキンの親方としての犠牲的なまでの熱心さと誠実さを表している。この義務感の背景には、ラスキンが7歳の時に送られた父ジョン・ジェイムズ (John James Ruskin) からの手紙があるかもしれない。その手紙はラスキンの人生で果たすべき義務について綴っている。

おまえは、優れた能力、そして天賦の才にすら恵まれている。おまえの存在の創造主であり能力の与え手であるお方に、自身の能力を磨くこと、そしてそのお方への奉仕において、また同胞の利益のために用いることを義務として負っているのだ。知恵によって人々を啓蒙し、学びによって時代を引き立てるのだ。十分に成熟したなら真実と宗教の源である神の助けとなり、様々な方法で人類に恩恵を与える人にならしめてくれるかもしれない己の精神の力を、怠惰や忍耐不足によっ

て眠ったままにしておくのは罪深いこととなろう。(Ruskin Family Letters 1: 209-10)

ラスキンが父権のあり方を神の人間に対する姿としてみていたことを考えると(16: 105)、健康状態の限界を超えてまで彼を尽力させたのも、子どもたちを導く「親方=父」としての強い宗教的使命感だったと考えられる。

この使命感は、教師—生徒という関係性に軸を移しながら、芸術教育や仕事における指導において垣間見られるようになる。「生徒」としての徒弟たちへの教育形態のひとつとして、「見る」力を養うべく対象物を自身の目で見えることを推奨していたラスキンは、彼女を自宅に招いて貴重な絵画の数々を鑑賞する機会を与えた。これは彼が1855年から教鞭をとった労働者大学の授業で、自ら「自然の素材」や画家に依頼して描かせた絵を教材として持ち込み(横山 55, 64)、学生たちにじかに見る体験をさせていたこととも結びつく。ヒル姉妹やその友人たちの書簡には、1855年の間にヒルが少なくとも四度ラスキン宅を訪れていたことが記されているが(LOH 36-39, 46-47, 56-57, 66-67)、三度目の訪問ですら、「…今でも私にとってはとても素敵なできごとです。思うに、これは変わらないわ。彼が価値あるというもの全てが思考の新しい視野を開いてくれるからだけでは無いの。私がずっと夢見ていた大変素晴らしい絵の数々で、彼の家がいったいなんだもの」(LOH 56-57)とヒルを大いに喜ばせた。これらの作品の中には、ターナーの「奴隸船(Slavers Throwing Overboard the Dead and Dying, Typhoon Coming On)」(1840)もあった(LOH 66-67)。生き生きとした表現と止め処なく続く会話的な文章からは、短い滞在時間であってもいかにヒルが芸術作品の数々を享受する機会をありがたく思っていたかが感じられる。このような体験を通して、ヒルは、ラスキンが理想とする「見る」力を養ったことだろう。

批評も、ラスキンの徒弟教育の特徴のひとつである。Iで取り上げた妹エミリーへの1855年のヒルの手紙からも、彼女の仕事に対する彼の批評の様子を垣間見ることができる。技術面への助言については前述の通りだが、彼の助言の方法に光を当ててみると、彼の指導者としての使命感とそ



れゆえの率直さが浮かび上がってくる。ラスキンの批評をヒル自身も価値判断を示す語を用いて要約しているように、励ましの言葉もあれば過ちの修正も含まれていた。Cookが呼ぶところの「彼の批評の率直さ」(*Life* 406)は、後にヒルの不安に影を落とすことになるのだが、横山千晶が指摘しているように、若い芸術家たちへのラスキンの「温かいまなざしだけでなく彼らを導く責任感」(26)に根差したものであったといえる。ラスキンはこのような導き方によって若手芸術家たちが正しく自身の技術を高めていけると信じていたのである。一方のヒルも、ラスキンの批評に忠実に耳を傾け、彼との師と生徒という関係性を深めていった。

ラスキンとヒルとの親方―徒弟関係は、「個人別のアプローチ」(ハーヴェー 104)を特徴とし、「教師と弟子という面ももったマスター・サーヴァントという社会関係の一表現であり、また同時に家父長制的人間関係の一つの環でもあった」(斎藤 181)中世の徒弟制にその原型を見出せるかもしれない。同時に、彼の親方―徒弟関係における彼の義務感や導き方は、幼少期より養われた彼の道徳観、そしてそれによって形成された芸術・社会観に基づいていた。それゆえラスキンの親方―徒弟関係は、多くの場合「純粹に職業訓練の一制度」(斎藤 182)となった19世紀の徒弟制とは異なり、ヒルをはじめとした徒弟を雇用するという実践的試みにおいて理想的な親方―徒弟の関係性を追求していったのである。

### III. 親方―徒弟関係におけるモラル感情と道徳的信念

皮肉なことにラスキンとヒルの親方―徒弟関係は、彼の理想と現実の乖離を露呈するものでもあった。ラスキンは、精神、興味、また活動において安定した人物とはいえず、それゆえ徒弟たちへの指導が不可解に、また気まぐれに映ることもあった。1859年、ヒルは、「ラスキンがわたしの将来についてどう考えているか、わたしは完全に彼に信頼をおいています―ただどうして彼が、模写したものすべてをそう軽蔑して話すのか、なのはどうしてまだそれらに取り組ませるかと思うのです。でも、それもいつか理解できるのでしょう」(*LOH* 146)と述べている。ヒルに対する親方ラスキンの曖昧性は、1860年になるとさらに不明瞭なものへと変容する。1859年の間、ヒルは*Modern Painters* 第五巻(1860)のためラスキンに頼まれ



た模写に取り組み続けていた。しかし、この作品でヒルの「能力や技術」(OH 147)に対するラスキンの言及はなく(7: 8n\*)、彼女のラスキンへの献身的な働きは落胆と疑念のうちに終わることになる。*Modern Painters*に名前が刻まれたことで、少なくとも「芸術家とみなされる人」(Whyte 47)にはなったものの、ヒルの芸術で身を立てるという夢は潰えてしまった。ここで、一部のラファエル前派との間に彼の指導が同様の不和をもたらせたことと比較してみると(Pascu-Tulbure 35-36)、ラスキンとヒルの関係性は概して良好で強く結ばれたものであったということがより謎めいてみえる。二人の親方—徒弟関係を結び付けたものは何だったのだろうか。

この二人の関係性をさらに紐解くために、強い結びつきを促す関係性を神と人間との結びつきにおいて説いた、*Modern Painters*第二巻で論じられている美的体験のモデルに注目したい。ラスキンによれば、自然といった美しいものを目の前にしたとき、美しいものを美しいと感じるように働きかけてくださる神の恩恵に対して、鑑賞者のうちに感謝や畏敬の念といったモラル感情が湧き上がる(4: 47)。この与え手である神と、恩恵の受け手である観察者との関係性は相互的で、両者の参与を前提としている。人間同士の関係性においても、このモデルは機能する。*Munera Pulveris* (1872)の補遺において、ラスキンは、「偉大な国家の政治経済は、与えることと受けることの双方を優美にする」(17: 293)と述べ、金澤周作が指摘するように(6)、チャリティにおける与え手と受け手の関係性を同様に美的なものとしての解釈することをラスキンは許している。ここでは、与え手が愛をもって与えた恵みは、感謝をもって受け手から返される。*The Stones of Venice*第二巻の“The Nature of Gothic” (1853)や*Unto This Last*で述べられているような(10: 195; 17: 42)、「心の捧げ物(gifts of the heart)」(10: 195、川端訳36)、犠牲的な愛や義のやり取りによって、お互いがより高貴なものへと高められていくのである。モラル感情や道徳的信念といった「心の捧げ物」によって支えられたこのような双方向的で互惠的な人間関係の構築が、ラスキンとヒルを約10年にわたり結び付けたものだったのではないだろうか。ここからは、ラスキンの理想とした親方—徒弟関係の精神的な繋がりに焦点を当てながらラスキンとヒルの関係性において交わされたモラル感情や道徳的信念を考察する。

前述のように不安定ではあったが熱心なラスキンの指導はヒルのラスキンに対する信頼によって応えられており、この信頼こそが、ラスキンの干渉を敬遠しがちであったラファエル前派からヒルを区別するものであったと考えられる。1857年秋、ラスキンから模写を委託されていたヒルは、多忙なラスキンと面会でできず期日を過ぎてもなおその仕事に取り組んでいた。ついに彼女は彼に不満を綴った手紙を出したが、その手紙ではラスキンとの関係性を、主人と犬—主人と交わした約束を忠実に守り、主人の指示を待っている犬—に面白く喩えている (LOH 103-04)。このエピソードは、ヒルから見たラスキンとの関係性と、ヒルのラスキンに対する忠誠とを巧みに描き出している。<sup>4</sup> ラスキン自身、そんなヒルからの信頼を感じていたのだろう。1862年9月12日付の手紙で、「あなたの私への信頼に感謝している」(OH 156) と感謝の念を表している。3ヶ月後、*Fraser's Magazine* にて出版された連載 (後の *Munera Pulveris*) の中には、「正確には、義務とはある人がもう一人にどんな物であれ行為であれ負っているものを意味し、忠誠とは前者がその義務を果たすことに対し、後者が信頼をおいていることを意味する」(17: 204n1) という、ヒルとの関係性を思わせる言葉が見受けられる。このようにラスキンのヒルとの親方—徒弟関係は、親方の義務と徒弟の信頼や忠誠心を礎として成立するものであったと考えられる。

上記に描かれたラスキンとヒルとの関係性は、「統治、導き、助け (ruling, guiding and helping)」(Roberts 4-5) からその中心的な義務が成り立つパターンリズムによっても特徴づけられる。このモデルは、心遣い (care) や指導 (guide)、また一方では干渉や支配が複雑に絡み合う場ともみなすことができるだろう。ラスキンとヒルを繋ぐこの複雑な関係性は、同年、1862年4月にヒルがラスキンに宛てた手紙の中で明らかになる。モラルや宗教についての熱情的な議論ののち、ヒルはラスキンとの関係性が壊れるのを恐れたのか、手紙の後半で一転して謙遜の態度へと舵を切る。

あなたが、労働、安楽、心の平穩、実に全てのことにに関して私よりはるかによくご存じなのは承知しています。私はあなたに手紙を書いたり話したりするときに、このことをかなり忘れてしまっているように時折思えるのです。その意識が私の中にいつもあるということはわ

かっています。*Modern Painters*の著者の存在を忘れたことは一度もありませんし、私が申し上げたことはみな、あなたには実に不可解なものとして映るでしょう。そんなあなたから学べるというのは大層な恩恵であると私は感じています。このことは、どうして私が「叱られる」ために来ることを好むのかという謎を明らかにしてくれはしないでしょうか？(OH 125)

年少の生徒として、徒弟として、ヒルは従順さを明瞭に示している。彼女が手紙の中で発する口調や言葉遣いにおけるこの変化は、前半の論争的な自身の態度が尊敬や愛情の欠如によるものではないとラスキンに納得させるような意図も汲み取れる。比較級(「はるかによく」)や異名(「*Modern Painters*の著者」)を用いることで、ラスキンの優越性、彼女がラスキンを慕う存在であるという認識が表現されている。さらに、ここで明確に描かれているのは親や教師によって叱られる子どもや生徒のイメージである。ヒルの文章からは、過ちを犯した際には修正してほしいという懇願や切望の気持ちすら感じられる。父親や教師、親方といった直接的な言葉は用いられていないものの、ヒルの言葉遣いは、ヒルがラスキンをそのような役割を担っている人物としてみていたことを示唆している。

ヒルがラスキンにみていた徒弟への父権主義的な関わり方は、ヒルが自身の身を立てる道について、「これはすべて彼のなすことであると感じていて、私には責務がないのです」(LOH 106)と困惑気味に述べる原因にもなりえた。けれども、ラスキンのチャリティ観においても「富者は、貧者の恭順を前提に、かれをやさしく、また厳しく教導する『父』(あるいは『母』)としてイメージされている」(金澤 4)のと同じく、このような導き方こそラスキンが信じていた親方—徒弟間における正しい関係であったといえる。従順さや忠誠によって結ばれたパターンリズミ的な親方と徒弟の関係性は、モラルの伝播という観点からもラスキンにとっては重要だっただろう。*Time and Tide* (1867)においてラスキンは、「下級の人々に手本を示すことは上流階級の義務です。そして、主に自らの野心を厳しく、適切に抑制することで、自分たちより下の人たちにも野心を抑えるよう要請し正しいとすることも同様の義務なのです」(17: 322)と説く。このラスキン

のモラル伝播のモデルでは、上流階級が自身の欲望を制限しモラル的な理想像を提示することで、下流階級の人々も同じように「慎み(restraint)」を実践していくことを期待されていた。二つの異なる階級間において提示される、この階級的で双方向的な関係性は、さらにより下級の人々の模範となり、感じとられ、繰り返され、受け継がれていく。ラスキンは、このようにして従順さや慎み深さといったモラル的特質が拡散しうるものと考え、父からの手紙にあったように、彼が「啓蒙する」義務を負っている人々を導くことができると信じていたのだ。ラスキンは自身も親方―徒弟関係を通して、勤勉さと下の者への自己抑制的な献身の大切さを徒弟たちに示していった。

#### IV. ラスキンのジェンダー観

前述のように、ラスキンとヒルの精神的な繋がり、宗教的にも捉えうる父と子の関係性によって支えられていたといえよう。興味深いことに、この関係性は、またジェンダー的な文脈でも読むことができる。聖書では、神とイスラエルの民の関係性が夫婦関係として描かれており、イスラエルの民の神への背信的態度は、姦淫の比喩を用いて表現されている(Ezek. 16.15-34)。同様に、“*Ruskin’s ‘Womanly Mind’*”において、Dinah Birchは神と人間の関係性を夫婦的なものとして一神を夫、ラスキン自身を従順な妻として一解釈している(315)。この父性的な権威性と母性的な従順さをジェンダー的な文脈で解釈しようという試みは、その従順さを「愛に満ちた服従(loving submission)」(Millett 100)と呼んで、ラスキンの女性観を批判したKate Millettの議論を想起させるかもしれない。ラスキンの多層化した親方―徒弟関係の一事例として、ラスキンとヒルの関係をジェンダー的領域に押し広げて分析してみたい。

*Sesame and Lilies* (1865)に収録されている“*Of Queens’ Gardens*”は、1864年にマンチェスターで行われた女子教育についての講演である。1860年代、知人の娘ローズ・ラ・トゥーシュ(Rose La Touche)の家庭教師を務めていたラスキンは、ウィニントン女子寄宿学校での教鞭とも相まって、女性と女子教育のあるべき姿についての議論に乗り出していた(Birch, “What” 122-23)。前の講演の“*Of Kings’ Treasuries*”の王のイメージと並

行し、ラスキンは女王という象徴的なイメージを理想的な女性像を描写するのに用いている。この女王的な人物像に彼が付した重要性は、*The Ethics of the Dust* (1866) や *The Queen of the Air* (1869) といった1860年代後半の著作にもしばしば象徴的なイメージとして表れていることから明らかである。ラスキンとヒルの関係はこれらの著作に先立つものであり、ヒルをラスキンの女王のイメージと関連づけた先行研究は見当たらないものの、ヒルはすでにラスキンの理想的な女性像のイメージを予型している。

ヒルの女王らしい特質は、まず、ラスキンへの共感的態度に認められる。1858年1月29日、ヒルはラスキンに以下のような手紙を記している。

でも、信じてください。あなたがご自身の考えや時間を捧げてくださり、犠牲にされた喜びの価値を、それを与えられたものは皆知っているということ。そして、あなたからの贈り物をさらに素晴らしいと感じ、ご自身が失われたものの代わりに、さらに溢れる喜びをあなたが享受されることを疑いません。…どの絵でも、私にそれを描かせることで、あなたの目的達成の助けになるのであれば、大層嬉しく思います。あなたへの多くの感謝が嬉しくて、あなたの心を十分に理解できていないからではなく、あなたの目的を完全に果たされるかもしれないからです。(OH 131-32)

この手紙からは、ヒルがラスキンに対して実用的また精神的な側面の双方で助力しようとしていたことが伺える。ラスキンへの慰めと励ましの言葉に始まり、ラスキンの献身的な支えを得ていたひとりとして、ヒルは彼への共感的な理解を示している。彼女の共感力は、1859年5月29日にラスキンから *Modern Painters* 第五巻のための模写依頼を引き受けてくれるか尋ねられたときに顕著となる。その結末は、前述のようにヒルを落胆させるものではあったが、ヒルはラスキンの申し出を快諾する。彼女は、自身のより芸術的能力を養うであろう仕事に取り組むことをせずに、正しく評価されず蔑ろにされている絵画を模写することによってラスキンを助けることを選んだのである。彼女の心を決めたのは、「それがラスキンにとって真の慰めとなる」(LOH 145) ようにという願いであった。

興味深いことに、この精神面での助力は、数年後の“Of Queens’ Gardens”におけるラスキンの女性の理想像に関する議論を予見している。ヒルはラスキンを助けるため、「自己発展 (self-development)」ではなく「自己否定 (self-renunciation)」(18: 123) を選択しているように見え、<sup>5</sup> またどこにいても「平安の場 (the place of Peace)」となりうる「家庭 (home)」(18: 122) をつくり出そうとしている。そして、家庭の外で闘い、「かすかな共感力と狭量な希望しか持てない」男性の「苦痛の深刻さを感じ、それを癒す道を考えられる」(18: 140) 共感力をもヒルは備えていたといえよう。ラスキンが「目的を完全に果たされる」よう模写の仕事を引き受けることで、ヒルはラスキンを親身に支えた。一方、ラスキンは出版や講義を通して、社会の不正やモラルの退廃への糾弾と改革に公的領域である社会において取り組んでいった。しかし、ラスキンは決してヒルの共感的な女王らしい役割を、ラスキンのために絵画の模写を行うという私的領域に留めようとしたわけではなかった。後述のようにラスキンは、社会活動家としてモラル的な共感力を社会で実践していくことをヒルに促してもいた。

もうひとつ女王らしい特性として、ラスキンは「女性の力は統治に適し、戦争には適さない」(18: 121-22) と主張する。この統治し導いていくという役割は、ラスキンがギリシャ神話の研究から援用したものと考えられる。彼は *The Queen of the Air* において、キリスト教の父なる神と同様に、女神アテナを正義を担う神 (19: 306-07)、また戦争の審判者として提示している (19: 309)。つまり、ラスキンのジェンダー的アプローチは画一的というわけではない。女王のイメージはより矛盾を孕むものであるが、また女神アテナを父なるキリスト教の神と交換可能な存在として扱うことによりさらに不明瞭なものとなる (Weltman 357)。ラスキンは、女王が権威的な力を持ちうる可能性を示唆し、慣習的に男性と女性にそれぞれ期待されてきた主導力と共感力の双方が女性においても体现されるべきだと考えていた。 *The Crown of Wild Olive* (1866) で商業主義的な出世の女神 (“Goddess of Getting-on”) に代わるべき神として、キリスト教の父なる神ではなくギリシャ神話の正義の女神を据え置いたように (18: 448)、ラスキンは女性の支配力と共感力を公的領域へと拡大するのを求めていたのではないだろうか。<sup>6</sup>



ヒルの場合に戻ると、ヒルはラスキンとの関係において常に支配的というわけではなかったが、前述のように、癒し導く役割を担っていたことは明らかであり、ラスキンにとって理想的な女王であったことだろう。実際、ヒルは住宅改革運動においても共感的なだけでなく支配的でもある存在だったようだ。Hewison が述べているように、「オクタヴィア・ヒルの制度は、管理している不動産の賃借人たちと家賃を回収する中流階級の女性たちとの間の親密な関係に依存していた。それは思いやりであり、しかし統制でもあった」(59)。賃借人たちへの権威主義的なヒルの関わり方は、第三者が感じるほどに彼女の周辺でははっきりと見られた (Whyte 59)。自身の住宅改革運動に乗り出す前にも、ヒルはラスキンの目には女王らしい人物像として映っていたことだろう。

ヒルが指導力や共感といった従来それぞれ異なったジェンダーと結びつけられてきた力を発揮し、ジェンダー間や親子間の二分法的な対立を崩したように、彼がヒルとの関係性の中で担った役割も流動的だった。一見、ラスキンの徒弟たちへの関わり方は父権主義的であり、父、親方、そして夫といった役割を担うことで慣習的に好まれてきた家父長的役割に従っているようにみえる。しかし、ラスキンはアテナ同様、不明瞭で「両性具有の」存在となりえたのだ (Weltman 370)。Birch が彼の自伝的背景に基づき、女性性をもった人物としてラスキンを見ているように (“Ruskin’s” 311-17)、ラスキンはヒルとの関係性において共感力や愛情という観点から慣習的な女性イメージに匹敵する存在と捉えることができる。

ラスキンのヒルへの共感的なアプローチは、彼女の健康面への配慮において明らかとなる。1861年頃、ヒルは過労により深刻な衰弱に陥っており、ラスキンは「自身の活力がくじかれない状態である」よう、容易でしかし割に合う楽しい仕事を引き受けるよう助言している (OH 148)。また、ヒルは1862年6月15日付の友人メアリ・ハリスへの手紙で、病がより深刻で顕著になってきたときにかけられたラスキンの言葉を綴っている。

「…ターナーの作品はおいておくんだ。真似できるものではない。私自身、諦めた。誰もが諦めてきたよ。それに、オクタヴィア、何度も何度も言いたかったのだが、自分が求められていると感じるほかの



ことにデッサンが決して邪魔されないようにするんだ。君は共感力と人々を教え助ける力を大いに持っている、それを使うのだ。そうすることは他の私への仕事と同じくらい、私のために働いているのだと思ってほしい。」(OH 155-56)

自身をターナーの作品を扱えない一人として含めることでヒルの心を和らげ仕事を止めるよう勧め、ヒルの体調に気を配っている。さらに、社会の役に立ちたいというヒルの思いに寄り添う言葉にも彼の共感力が読み取れる。ヒルの「共感力と人々を教え助ける力」を評価していたラスキンは、ヒルが芸術を通してさらに養ったそれらの力が芸術にとどまらず社会においても大きな力となって発揮されることを確信し、後押ししていったのである。

ヒルを独占しまいと譲歩し、共感的態度を示したラスキンは男性的ではないようにみえ、G. J. Barker-Benfieldが提示する18世紀の「男性に適した感受性 (sensitivity for manhood)」(142) の議論を髣髴とさせる。しかし、ヒルに示されたラスキンの姿は、男性は権威的であるだけではなく共感的であるべきだというラスキンの考える理想の男性像とも一致している。もし、「“Of Queens’ Gardens”でのラスキンの議論」が「思考の奇妙なジェンダー横断的な動きの問題として」(Birch, “Ruskin’s” 315) 捉えられるなら、男性の聴衆に向けられた“Of Kings’ Treasures”もまた、男性性と女性性の境界線を不明瞭にしている。*Modern Painters* 第五巻で共感によって「紳士」を「低俗な人」から区別させているように (7: 347)、「低俗な人」に欠けている特徴として、共感する能力を挙げている (18: 80)。この共感できる力としての「優しさ (gentleness)」が男性を「紳士 (gentleman)」にするのだ。ラスキンのヒルへの思いやりや社会活動に対する情熱への後押しは、この優しい男性性 (gentle-manliness) を体現していたものであっただろう。彼らの関係性は完全に家父長的なものでもなく、かといって完全に女性化されたものでもなかった。ジェンダーの領域を往来しながら異なった役割を引き受けることで、彼らの親方と徒弟という関係性はより複雑で流動的なものとして捉えうるのである。

## V. 結論

このように、ラスキンは彩飾の復興によりモラル精神の向上を促すような芸術の回復を目指す中で、愛や信頼、忠義によって結ばれた親方—徒弟関係をヒルとの間に築いていった。ヒルとの関係性は、近代の大量生産に代表される機械的な労働への彼の批判や同時代のチャリティへの疑問、また幼少期より培われた道徳観や芸術観を大いに映し出すものであった。ラスキンとヒルの親方—徒弟関係は決して労働のみによって定義されるものではなく、父と子という愛情と義務に満ちた家族的な関係性、また教師と生徒という教育的な関係性としても捉えることができる。また、彼のジェンダー的アプローチは、慣習的な男性と女性の役割を曖昧なものにし、男性にも女性にも統治力と共感力を体現するよう求めた。このようにラスキンの親方—徒弟関係は複層的であったが、確たる社会行動の基盤となる統治力と共感力を生み出すモラル感情をラスキンは大切にしていたといえる。この初期の親方—徒弟関係を通し一層育んだ、他者への愛や信頼といったモラル感情を礎として、ヒルは1864年より着手した住宅改革でその統治力と共感力を発揮する。そして、今度は彼女自身が住民たちと相互的な精神的繋がりを築きながら、彼らのモラル感情の涵養に携わっていくことになる。それは、貧困と劣悪な環境下で等閑にされてきた労働者たちの精神と生活に変化をもたらしていった。ヒルが社会活動への転換に際し、それでもラスキンとの「精神的な繋がりは切れることがないと信じた」(OH 163)と述べたこと、またその後の彼女の精力的な社会活動は、親方—徒弟との精神的な繋がりを通し、芸術・社会を回復したいというラスキンの願いが徒弟へも引き継がれたことを物語っているのではないだろうか。

### 文末脚注

- 1 本稿では、illumination の訳語として「彩飾」を用いる。ラスキンは、この彩飾を「眼に美しく映るほどに、完全な色彩—青、紫、緋、白、金といった色—を付与した文字を造る芸術」と定義し、「彩飾と本来の絵画との相違は、彩飾は影を許容しないが、純粹色彩のグラデーションだけは許容するという」と述べる(5: 139、内藤訳 88-89)。また、この彩飾を行う“illuminator”の訳としては、「彩飾師」をあてる。
- 2 本書で扱う書簡は、*Life of Octavia Hill*. Edited by Emily S. Maurice,

- MacMillan, 1913 及び *Octavia Hill: Early Ideals*. Edited by Emily S. Maurice, George Allen, 1928 に依拠する。
- 3 この透察的想像力については、*Modern Painters* 第二巻第三部第二節第三章を参照 (4: 249-88)。
  - 4 ヒルは、従順さの大切さについて、母キャロラインから学んでいた可能性もある。キャロラインは、著書 *Notes on Education for Mothers and Teachers* (1906) の中で、この従順さについて触れている (15)。
  - 5 ここでの“self-renunciation”は、ラスキンが *The Ethics of the Dust* で呼ぶところの“suicide” (18: 243) を必ずしも意味しているわけではない。ラスキンによれば、“suicide”は、「見る」ことを含めた正しい種類の喜びを抑圧することである (18: 284)。
  - 6 Birch は、“What Teachers”で、従来のラスキンへのジェンダー批判に対し、彼の女子教育発展への尽力を再評価している。

#### 引用・参考文献

- \* John Ruskin の作品からの引用は全て、*The Library Edition of the Works of John Ruskin*, edited by E. T. Cook and Alexander Wedderburn, Allen, 1903-1912, 39 vols からであり、巻数とページ数のみ (7: 205) のように記載する。
- \* 本稿では、*Life of Octavia Hill*. Edited by Emily S. Maurice, MacMillan, 1913 を LOH、*Octavia Hill: Early Ideals*. Edited by Emily S. Maurice, George Allen, 1928 を OH と略称を用いて表記する。
- \* 『芸術の真実と教育』内藤史朗訳は *Modern Painters* I の第一部のみの訳であり、第二部の訳は『構想力の芸術思想』に収められているが、本稿ではそれぞれ巻数と訳本が一致する箇所のみ引用している。

Anderson, Anne, and Elizabeth Darling. “The Hill Sisters: Cultural Philanthropy and the Embellishment of Lives in Later-Nineteenth-Century England.” *Women and the Making of Built Space in England, 1870-1950*, edited by Elizabeth Darling and Lesley Whitworth, Ashgate, 2007, pp. 33-48.

Barker-Benfield, G. J. *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain*. U of Chicago P, 1992.

Birch, Dinah. “Ruskin’s ‘Womanly Mind.’” *Essay in Criticism*, vol. 38, no. 4, 1988, pp. 308-24.

---. “‘What Teachers Do You Give Your Girls?’ Ruskin and Women’s Education.” *Ruskin and Gender*, edited by Birch and O’Gorman, Palgrave, 2002, pp. 121-36.

Cook, Edward Tyas. Introduction. Ruskin, *Works*, vol. 12, 1904, pp. xvii-lxxxviii.

- . *Life of John Ruskin*. Vol. 1, George Allen, 1911. 2 vols.
- Darley, Gillian. *Octavia Hill: A Life*. Constable, 1990.
- Eagles, Stuart. *After Ruskin: the Social and Political Legacies of a Victorian Prophet, 1870-1920*. Oxford UP, 2011.
- Hewison, Robert. “‘You Are Doing Some of the Work that I Ought to Do’: Octavia Hill and Ruskinian Values.” “*To the Utmost of Her Power . . .*”: *The Enduring Relevance of Octavia Hill*, edited by Samuel Jones, Demos, 2012, pp. 57-63.
- Hill, Caroline Southwood. *Notes on Education for Mothers and Teachers*. Seeley and Co., 1906.
- Hill, William Thomson. *Octavia Hill: Pioneer of the National Trust and Housing Reformer*. Hutchinson, 1956.
- The Holy Bible*. Authorized King James Version, Thomas Nelson, 2001.
- Landow, George P. *The Aesthetic and Critical Theories of John Ruskin*. Princeton UP, 1971.
- Life of Octavia Hill*. Edited by Emily S. Maurice, MacMillan, 1913.
- Millett, Kate. *Sexual Politics*. Hart-Davis, 1971.
- Nunn, Pamela Gerrish. “Ruskin’s Patronage of Women Artists.” *Woman’s Art Journal*, vol. 2, no. 2, 1981, pp. 8-13.
- Octavia Hill: Early Ideals*. Edited by Emily S. Maurice, George Allen, 1928.
- Pascu-Tulbure, Cristina. *Ruskin and Burne-Jones: The Making of a Modern Painter*. 2011. U of Liverpool, PhD dissertation. EThOS, [ethos.bl.uk/OrderDetails.do?uin=uk.bl.ethos.576953](http://ethos.bl.uk/OrderDetails.do?uin=uk.bl.ethos.576953)
- Prochaska, Frank. *Women and Philanthropy in Nineteenth-century England*. Oxford UP, 1980.
- Roberts, David. *Paternalism in Early Victorian England*. Croom Helm, 1979.
- The Ruskin Family Letters: the Correspondence of John James Ruskin, His Wife, and Their Son, John*. Edited by Van Akin Burd, Cornell UP, 1973. 2 vols.
- Ruskin, John. “Addresses on Decorative Colour.” 1854. *Works*, vol. 12, 1904, pp. 474-508.
- . *The Crown of Wild Olive*. 1866. *Works*, vol. 18, 1905, pp. 373-533.
- . “Employment for the Destitute Poor and Criminal Classes.” 1868. *Works*, vol. 17, 1905, pp. 540-46.
- . *The Ethics of the Dust*. 1866. *Works*, vol. 18, 1905, pp. 193-368.
- . *Giotto and His Works in Padua*. 1853-60. *Works*, vol. 24, 1906, pp. 7-123.
- . *Lectures on Art*. 1870. *Works*, vol. 20, 1905, pp. 5-179.
- . Letters I. *Works*, vol. 36, 1909.

- . *Modern Painters* I. 1843. *Works*, vol. 3, 1903.『芸術の真実と教育——近代画家論・原理編I』内藤史朗訳、法蔵館、2003年。
- . *Modern Painters* II. 1846. *Works*, vol. 4, 1903.『構想力の芸術思想——近代画家論・原理編II』内藤史朗訳、法蔵館、2003年。
- . *Modern Painters* III. 1856. *Works*, vol. 5, 1904.『風景の思想とモラル [近代画家論・風景編]』内藤史朗訳、法蔵館、2002年。
- . *Modern Painters* V. 1860. *Works*, vol. 7, 1905.
- . *Munera Pulveris*. 1872. *Works*, vol. 17, 1905, pp. 119-293.
- . “The Nature of Gothic.” *The Stones of Venice* II, 1853. *Works*, vol. 10, 1904, pp. 180-269.『ゴシックの本質』川端康雄訳、みすず書房、2011年。
- . *The Political Economy of Art (A Joy for Ever)*. 1857. *Works*, vol. 16, 1905, pp. 5-169.
- . *Praeterita*. 1885-89. *Works*, vol. 35, 1908, pp. 5-562.
- . *The Queen of the Air*. 1869. *Works*, vol. 19, 1905, pp. 283-423.
- . *Sesame and Lilies*. 1865. *Works*, vol. 18, 1905, pp. 5-187.
- . *Time and Tide*. 1867. *Works*, vol. 17, 1905, pp. 299-482.
- . *Unto This Last*. 1862. *Works*, vol. 17, 1905, pp. 5-114.
- . *The Works of John Ruskin*, edited by E. T. Cook and Alexander Wedderburn, Library Edition, George Allen, 1903-12. 39 vols.
- Weltman, Sharon Aronofsky. “Mythic Language and Gender Subversion: The Case of Ruskin’s Athena.” *Nineteenth-Century Literature*, vol. 52, no. 3, Dec. 1997, pp. 350-71.
- Whyte, William. “Octavia Hill: the Practice of Sympathy and the Art of Housing.” *Octavia Hill, Social Activism and the Remaking of British Society*, edited by Elizabeth Baigent and Ben Cowell, School of Advanced Study, U of London, Institute of Historical Research, 2016, pp. 47-63.
- 金澤周作「チャリティとラスキン」『ラスキン文庫たより』第76号、2018年、1-7頁。
- 斎藤修「熟練・訓練・労働市場—工業化と技術移転の問題を考えるために—」『シリーズ世界史への問い2 生活技術 生産の技術』柴田三千雄・ほか編、岩波書店、1990年、157-92頁。
- ハーヴェー、ジョン『中世の職人I 職人の世界』森岡敬一郎訳、原書房、1986年。
- ベル、E. モバリー『英国住宅物語：ナショナルトラストの創始者オクタヴィア・ヒル伝』平弘明・松本茂訳、中島明子監修・解説、日本経済評論社、2001年。
- 横山千晶『ジョン・ラスキンの労働者教育：「見る力」の美学』慶応義塾大学出版会、2018年。

—神戸女学院大学大学院

## Summary

### Ruskin and Hill: An Example of Ruskin's Master-Apprentice Relation and Moral Education

Mai Tsumura

In the early 1850s, John Ruskin (1819-1900) embarked on employing artisans to direct moral enhancement by artistic activities. One of such apprentices was Octavia Hill (1838-1912), famous for her housing reform and the National Trust movement. In previous criticism, Ruskin's relation with Hill has been gauged in his support for Hill's housing reform from 1864 or given negative assessment from a gender perspective in terms of his reducing her to a copyist. Nevertheless, Ruskin's way of engagement in the earlier part of Hill's life was not so much irrelevant to her later social activities as cultivated her moral feelings and perceptions to bloom in them. It was where Ruskin put into practice his ideal master-apprentice relation by his own against a distorted relation between master and worker in modern mass production.

This paper examines Ruskin's complex and dynamic relation with Hill during the 1850s and the early 1860s as an example of his master-apprentice relation. It highlights the interactions and moral sentiments exchanged between Ruskin and Hill by closely looking at the correspondence between them and their wider circle. The paper also explores how Ruskin's master-apprentice relationship with Hill was informed with his religious background and gendered perspectives. By doing so, it aims to demonstrate their relation entailed complexity and ambivalence and that it was nonetheless sustained and even enhanced by moral sentiments and principles of sympathy, duty and trust, which fit into Ruskin's ideal master-apprentice relationship.

